武蔵野日曜聖書講筵

天

――マタイ伝第６章19～26節、７章21～27節――

１９９５年11月５日
小池辰雄

敬天愛人　天神・天人　天道　天に酔う　楽しくて力がきて生命がきて　天国人

【マタイ6】

19なんじら己がために財宝を地に積むな、ここは虫と錆とが損い、盗人うがちて盗むなり。20なんじら己がために財宝を天に積め、かしこは虫と錆が損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。22身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。24人は二人の主に兼事うること能わず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼事うること能わず。25この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。

【マタイ7】

21我に対いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22その日おおくの者、われに対いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや」と言わん。23その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

24さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬えん。25雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。26すべて我がこれらの言をききて行わぬ者を、沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬えん。27雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし』

●敬天愛人

今日の主題は『天』という。私は昔から「天」という言葉をいろいろに使っていました。自分の雅号も「天鐘」とか「天晨」とか「天弓」とか、大体「天」がつく。天は、概念的にははっきりしないけれども、中国の宗教的な対象であった。天は宗教的な、説明のできない対象として考えられてはいたわけです。

西郷隆盛の言葉に

「敬天愛人」

という言葉がある。天を敬し人を愛する。「敬天」が先なんです。敬天がなければ本当の「愛人」はできない。南洲というひとは非常に人間性の豊かな、思い遣りの深い人でした。私は、明治の初年の大人物は南洲の他にいないと思うくらいです。西郷隆盛の伝記をお読みになってごらんなさい。感嘆しますね。

近頃のところでは賀川豊彦です。この人は日本のキリスト教の歴史において最近のところで一番の優れた人だと私は思っております。私の育ったいわゆる「無教会」――内村鑑三の流れ――には賀川豊彦に匹敵するひとはありません。それくらい、賀川さんというのは素晴らしい内容の方です。苦しんでいる人や可哀相な人や病める人などを相手にキリストの愛の道を身をもって実践した人です。そういうような先輩は無教会にはいない。私は賀川さんを最も尊敬しております。むしろアメリカで賀川さんは一番知られているようですね。

孔子ですら、天を言いがたきところの対象として拝していた。西郷隆盛が正に「敬天愛人」です。パウロが、

「本当に人を愛さないで神さまを愛することができるか」

と逆なことを言いましたけれども、天を敬することと人を愛することとは、敬天と愛人とは離すことができない。本当の愛人は敬天に発し、敬天は必ず愛人に展開する。

日本の教育をみていると情けない。精神的に日本は今一番ダメではないですか。学校の先生が本当にそういう宗教的な境地をいったいどれくらい持っているかと思わざるをえない。だから「オウム」（オウム真理教）なんていうのがでてくる。とんでもない。あれはサタンの手下みたいなやつで非常に傲慢な人間です。

我々は神・キリストの前に平伏さなくてはダメです。本当に平伏すことをしない人は、この信仰の世界ではダメなんです。平伏しの魂ということが大事です。

無というのは――禅宗でも無と言いますが――悟りの無ではない。福音の無は与えられたる無、賜（たまわ）りたる無なんです。自分ではゼロになれない。我々は無をたまわる。「無をたまわる」とは「無限無量の神・キリストをいただく」と同じことです。

「０＝∞」（ゼロ＝無限大）

なんです。私は「無者」と言います。

「神一切で自分が無かったひと」

これはキリストです。だから、キリストは無者の最たるひとです。世界中でキリストのことを「無者」という言い方をする人はおそらくないでしょう。キリストこそ無者だった。父なる神のほかは何も考えてない。

●天神・天人

ヨハネ伝３章12節に、

「12**われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争で信ぜんや。**
13**天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。**」（ヨハネ３・12～13）

とある。この「天」という言葉は時々、「神」という言葉と同義語的に使っている。神と天とは同じことになっている。福音の世界ではそれがはっきりしてます。正に天神なんです。父なる神の他は何も考えてないのが、このイエス・キリストです。だから、キリストにとっては天が一切、神が一切なんだ。「天より降りし者、即ち人の子」とは自分のことです。

「**宝を地に積むな、天につめ**」（マタイ６・19～20）

という言葉もある。ヨハネ黙示録21章にも、

「1**我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。**」（黙示録21・１）

とある。「新しき天」とは霊的な天です。我々にとっては、天はただ自然科学的な空間ではない。霊的な天界です。キリストが昇天した、あの天は霊界の天です。我々は天人なんです。キリスト者は天の人なんです。古里は天です。天からやってきて、また天に帰る。天が本来の故里です。

「**人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず**」（ヨハネ３・３）

というのは

「ひと新たに天からくだってこなければ」

と同じことです。

マタイ伝６章は非常に大事なところです。

22**身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。**23**然れど、なんじの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。**

目が「ただしい」というのは、「単純である」ということです。

26**空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優るる者ならずや。**

ここでもキリストは「天の父」とはっきり言っている。

ゼロの、自分を何者ともしないという、無私無我の無です。これは虚無ではない。実存的な無です。そうするとこれは無限大になる。神・キリストと一つになる。これは「恩恵によって」です。「信仰によって」ではない。神・キリストの恵みに圧倒されて、無我にされてしまった。私は

「信仰によって生きる」

とは言いたくない。

「私はキリストに圧倒されて生きています。恵みに圧倒されて生きています」

と。自分の信仰なんか問題にしない。

「自分の信仰がどうだ」

なんて言っていると、反って相対的なおかしなことになる。

「私は信仰なんかありません。あるのはキリストの恵みだけですよ」

と言う。完全に受け身です。大体みな、

「信仰心が足りない。信仰心を深くする」

とか言っている。そんなことを言ってたら、これは相対的な世界だから疲れてしまう、くたびれてしまう。力が来ない。

「何もありません。もう圧倒されています。圧倒されて楽しくて、うれしくて、力が来て仕方がありません」

というのが一番いい。

●天道

私はテレビで一遍はっきり言いたいね。いい加減なキリスト教がたくさんあるから。大体、「教」ではない。「キリスト教」なんて言うからいけない。教えではない。これは道です。天道なんです。教えだなんていうから、

「教えの内容はどうだ」

なんて一生懸命で考える。くたびれてしまう。それは聖書には「教え」という言葉もあるさ。キリストもパウロも言ってらっしゃる。けれども、それは文字の上から捕まえたら、躓きになる言葉です。

なぜ私は元気かというと、本当にキリストという元気が、元の気が入ってくるから、それだから元気なんだ。人間的に元気でも何でもない。私は弱虫のダメなやつなんだ。弱虫のダメなやつに力が来てしょうがない。ありがたくてしょうがない。私は皆さんと、こういう聖書のもの凄い真理を一緒に聞いたり語ったりしているのが一番楽しい。だから、集会が終わる時に一番力が来ている。

「集会が終わってくたびれた」

なんて、冗談じゃない。

キリストはああ言ったり、こう言ったり、いろいろなことを言っている。けれども、その言葉に躓かないようにしてください。パウロだってみなそうです。聖書の言葉は躓きの言葉だ。一生懸命で

「この意味はどうだ」

なんていって意味を詮索しているうちは――

「論語読みの論語知らず」

という言葉があるが――

「聖書読みの聖書知らず」

ということになる。

「その言葉の奥の響き、生命、それが本当に受けとれるか受け」

とれないかということ。我々はそういう読み方です。

我々自身が聖書の続きを書かせられているようなものです。私たち自身がそういう文字だから、書くの書かないのはどうでもいい。活字、活ける文字なんだ。我々自身が活字なんです。ルターが

「聖書はかけらに過ぎない」

とはっきり言った。みんな、聖書は立派なまとまったものだと思っているが、ルターは

「これはかけらだ、断片だ。神の言は限りなく続いていくんだ」

と。それは聖書のもの凄さを本当に知っている人の言葉です。枠に入れない。聖書という本は枠のない本です。

●天に酔う

それで、私は天に酔っているわけだ。エレミヤ記の中に「酔える人のごとく」という言葉がある。

「9預言者輩のために我心はわが衷に壊れ、わが骨は皆震う。且つエホバとその聖言のためにわれは酔える人のごとく酒に勝たるる人のごとし。」（エレミヤ23・9）

とある。また、エレミヤは2章でやはり凄いことを言っている。

「12天よこの事を驚けいたく怖れよ、とエホバいいたもう。13そはわが民はふたつの悪事をなせり。即ち活ける水の源なる我をすて自己水溜を掘れり。すなわち壊れたる水溜にして水を有たざる者なり。」（エレミヤ2・12～13）

「ダメだよ、そんなのでは」と。「水溜」みたいな、そういう信仰が多いわけだ。エレミヤ記には凄いことが書いてあるね、1章の5節でも。

「5われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり、汝が胎をいでざりし先に汝を聖め、汝をたてて万国の預言者となせりと。」（エレミヤ1・5）

こういうことがはっきり言えるんだからね。まったくエレミヤは凄い。

「いろいろなものがやってくるけれども、心配するな」

と後の方に書いてある。

昨日、イスラエルのラビン首相が暗殺された。わからずやの青年が暗殺なんかするのはとんでもない。言葉の上でいくらでも争えばいい。それを暴力を使ったらもうダメです。世界はだんだん狂ってきたな。

「終りにはもう信仰なんかない」（ルカ18・８）

と聖書に書いてある。皆さんは、イザヤ、エレミヤ、ヨハネ、パウロと同質の魂になってください。いわゆるクリスチャンではない。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言ったでしょ。あれです。内在関係で、キリストと一つになっていなければダメなんだ。それはキリストの力でもってそうならざるを得ない。圧倒されるから。

ロマ書８章の終りの方は凄い。35節から、

「35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。37然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」（ロマ８・35～39）

とある。キリストの福音を一番端的に書いているところはローマ書８章です。ここに一切書かれていると言ってもいいくらいです。

●楽しくて力がきて生命がきて

聖書くらい楽しい本はない。聖書を読んでいると、楽しくて力が来て生命が来てしょうがない。聖書が楽しくならなかったら、本当は読んでいることにならない。聖書の作者と同じ気持になって、「そうだその通りだ」と言う。そういう上からの示しでもって、響きでもって書かれているから、これは絶対に滅びない不滅の本です。ゲーテが、

「諸々の本はみなダメになっても、聖書一巻は残る」

と言った。ゲーテという人はやはり見るところをちゃんと見ている人で、いわゆる註解ではなくて、彼は本当に聖書を身体で読んでいた。身読していた。ゲーテの力はそこから来ている。いわゆる研究でゲーテは読めない。直観しなければ、体感しなければわからない。研究家は微にいり細にいり研究している。それではくたびれてしまう。悪口を言うわけで

はないけれども、本質を誤ってはダメだということです。

エレミヤも非常に深い愛のひとだね。エレミヤ記９章１節、

「**1ああ我わが首を水となし、我目を涙の泉となすことをえんものを。我民の女の殺されたる者の為に昼夜哭かん。2嗚呼われ曠野に旅人の寓所をえんものを。我民を離れてさりゆかん。彼らはみな姦淫するもの悖れる者の族なればなり。**」（エレミヤ９・１～２）

「曠野に行って自分は泣きたい、我が民はもう相手にならない」という。

「もうこんな日本には愛想をつかした」

と内村鑑三が言った。

「いくら福音を説いても、さっぱり本当に受けとってくれない。もう嫌になってしまった」

というわけです。日本はどうも浅薄だね、本当の宗教的な深さというものを持っていない。女の方でもどなたでも遠慮なしに日本の代表者になってください。

●天国人

私たちはキリストによって正に地上にありながら、新しき天と新しき地を歩いているわけです。キリストを持っている人は新しき天を持っている、新しき地を歩いている。この「新しさ」（カイノス）は古びない。

ところで、どういう人が天に入るか。これはキリストがちゃんと仰っている。マタイ伝７章に、

「**21我に対いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。22その日おおくの者、われに対いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや」と言わん。23その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。**」（マタイ７・21～23）

要するに、

「天国人になっていなければダメだ」

ということです。さっき言った天人です。我々はみな天国人です。

「**天国は汝らのうちにあり**」

とキリストが言われたのはそのことです。

「天国をうちに持っていなければ、いわゆる信仰信仰なんて言ったってダメだよ」

ということです。実際に実践していることが大事です。

「聞いてから、それからだんだん実践しよう」

なんていう二段構えではダメです。即の世界に入らないとね。読むこと、聞くことと同時に直ちにその世界に入る。これが、

「御意を行う者のみ、之に入るべし」

とキリストが言われた、そのことです。マタイ伝7章、

「24さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬えん。25雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。26すべて我がこれらの言をききて行わぬ者を、沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬えん。27雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし』」（マタイ7・24～27）

「行わない者はダメだよ」

というわけです。我々は現に天国人です。

「天国は汝らのうちにあり」

とキリストが言われた、そういう天国人です。地上の運命環境がどうなろうと、そんなことで支配されない。不滅の人です。だから、我々は死を知らない。地上の生涯が終わったら往生する。往きて生きる。あちら側に往って生きつづける。

「小池先生は死んだ」

なんて絶対に言わないでくださいよ。私は死にませんから。向こう側に往くだけのはなしです。パウロが言ったとおり、肉体を棄てて霊体になって行くんです。霊的な身体を、霊体をいただいて向こうの世界に行く。パウロがはっきり言っているんだ。パウロにしろ、ヨハネにしろ、熾んなるものですよ、本当にキリストと一つになっているからね。

「我とキリストとは一つなり」

という。ロマ書9章1節、

「1我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、2我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることとを我が良心も聖霊によりて証す。3もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」（ロマ9・1～3）

「本当にみんなを愛しているんだ、みんなの救われるためには私はキリストに棄てられてもいいんだよ」

と。これ以上の言葉はない。

親鸞の信仰がそういう質の信仰だった。あの親鸞というのは凄い。私は仏教の世界ではあの親鸞が一番好きだ。親鸞の師の法然も四国に流されて、四国の遊女たちを救ったという。

この福音は楽しいですね。皆さん、楽しくないかね？　この福音が楽しくなかったら、うそだよな。